学び続ける学校

別海町立別海中央中学校　校長室便り
発行　校長　青坂信司
第１０号平成２７年１１月２７日（金）

※「子供の出番を多くするためには、教師の出番を少なくすることである」

生徒指導の基本は「授業」

◆生徒指導のポイントは何か。校長室で、ベテラン教師が教育実習生にレクチャーしていた。本当は、その対話の中に入るつもりはなかったのだが、とても興味深く、面白い話題があったので、時折口を挟むことをしてしまった。その中で、ベテラン教師は教育実習生に「結局、授業なんです。授業がきちんとしていることが、最大の生徒指導なんです。」と言った。それも何度か繰り返した。私は、それを聞いてさすがだと思った。同感である。大袈裟な話かもしれないが、学校教育のポイントをおさえているとさえ思った。

◆昔から教師の中では「授業で勝負」という言葉がある。プロと呼ばれる優れた教師は間違いなく日々の授業を大切にし､授業の中で全ての子の可能性を引き出そうとしてきた｡しかし、多くの教師は満足いく授業ができない。一時間、一時間大切にしていたとしても、教師本人がその授業を振り返ってみると、反省することが多く、満足することはほとんどないのである。それこそ、授業は奥深く、日々努力しても、満足いく授業ができたという境地にはなかなか到達できない。反省の日々なのである。それが私を含めた大方の教師の実感だろう。

◆高校時代、ある日英語の授業を受けていた。教師が問題を出した。教師は、列ごとに生徒を順番に指名していった。前の子が指名され、答えた。次は私が指名されると思った。しかしその教師は「青坂はどうせやっていないだろう」と言って、隣の生徒を指名した。私は、顔から火が出るほど恥ずかしかった｡「何故、俺を指名しない！俺がここで英語の授業を受ける意味とは何なのだ！俺が、この教室にいてもいなくても同じではないか｡ふざけやがって！」と心底思った。今でも、そのときのことを鮮明に覚えている。

◆もしかしたら、その教師には悪気はなかったのかもしれない。もしかしたら、ほとんど勉強せず部活に明け暮れているような私に配慮してくれたのかもしれない｡仮にそうだとしても、本当に教師の発したその言葉や私を避けた指名の仕方はよかったのか。一人ひとりの生徒の存在を認め、限りなく尊重することが教師には求められる。教室の中に一人でも、自分の存在意義を感じられない授業が決していいはずがない。それこそ、よく言われる「自己存在感を与える」という生徒指導の基本ではないのか。悪気がなかったとしても、あまりにも鈍感なのではないか。今の私ならそう思う。

◆授業の中での自己存在感。このことを一時間、一時間の授業の中できちんと保障することが教師には求められる。特定の生徒だけを相手にするような授業。教師の質問に手を挙げる生徒だけで進められていくような授業。逆に、できる生徒は放置されるような授業。こうした授業では、生徒は自己の存在意義を感じられない。もしくは感じにくい。

◆いわゆるできる生徒もできない生徒も、全ての生徒を包み込められるような授業。そうした授業をしていれば、どんな生徒でもその教師についていこうとする。教師への信頼と尊敬が培われていくような授業を目指せば、おのずと生徒指導の機能が働いている授業となる。どんなに教師に対して信頼と尊敬があろうと、教室の中には、日々さまざまな問題・トラブルが生じる。だとしても、教師と生徒の間に強いつながりがあれば、生徒は何とか乗り越えていけるのだと私は思うのである。しかし、その道は限りなく遠く険しいのである。